

## 『グローバル教養海外実践（オーストラリア）に参加して』

看護学部 2 回生 静麻友

今回このオーストラリア研修に参加して得たものとしては、視野がとても広がったことが挙げられる。海外に行ったことは過去にも何度もあったが、今回は旅行ではなく研修であったこともあって、企業訪問や兵庫県の交流センター、現地の大学の見学など、普段の旅行では訪問出来ない場所へ行くことが出来た。

中でもまず、INPEX への企業訪問は私にとって大変刺激になった。私は看護学部にも所属してはいるが、将来の目標は病院で働く看護師ではなく、企業で働く保健師である。したがって、実際に企業で活動している医療従事者がどんな仕事をしているのかを、わずかにでも知ることが出来たのがこの研修で一番の収穫であった。また、私は看護学部にも所属しているため、実習で病院に行くことはあっても、企業訪問することはない。企業訪問は初めてであったため、もちろん各企業によって違いはあると思うが、自分が将来働きたいと考えている「企業」という場所がどういった雰囲気であるのかを知るよい機会になった。

次に、カーティン大学を見学できたことも、自分が専攻している分野以外の様々な内容を知ることが出来たという点でとてもいい勉強になった。実際に現地の先生方の専攻している分野の話を聞いて、勉強になったことも多かった。日本とオーストラリアでのごみの処理方法の差などの話から、オーストラリアやその他多くの国で深刻な環境問題があるということが分かり、それを解決するためにカーティン大学工学部での研究が必要とされていることを知れた。

また、カーティン大学の看護学部を見学した際には、どういった授業があつて、どういった施設で演習をしているのかなど細かく教えていただいた。カーティン大学では座学よりも演習に時間をかけている。それは、日本とオーストラリアを含む多くの国との違いで、日本では「大学で勉強して、就職する。そして会社が新入社員を育てていく」というのが主流な中で、海外では「大学で勉強したから、就職した時点で自立して仕事ができる」ということが社会の常識だからだと考える。教授たちの話を聞く中で、こういった各国での社会における文化の差も知ることが出来た。また、カーティン大学の看護学部にも留学生として入学する条件をうかがうと、一定の英語レベルがあることだと教えていただいた。なぜなら、オーストラリアでは看護師資格を取ることが出来ても、英語のスキルが低ければ実際に看護師としては働けないからだそうだ。英語のスキルという大きな壁があるのにもかかわらず、カーティン大学看護学部では、多くの留学生が在籍している。そういう面でも日本とは大きな違いがあると感じた。

この研修では、病院で働く看護師以外にも企業やその企業が作業している現場で働く看護師がいることを知れた。また、病院以外で働くには保健師になるしかないという、これまでの自分の考えを改められた。そして、日本で看護師資格を取得した後に、国際看護師として働くにはどのようなルートがあるのかや、労働環境、資格取得の条件に至るまでを知ることが出来た。これまでは、まだ自分の将来の職のビジョンがはっきりしておらず、看護師になるか保健師になるかの 2 つの選択肢しかなかった。だが、この研修で学んだことや得た情報から、選択肢はそれほど少なくなく、まだまだ沢山の道があることに気づけたので良かった。